Book Review　李栄薫 著『反日種族主義 日韓危機の根源』（文藝春秋）を読む

日韓で異なる副題と「種族主義」という用語について

西岡　力
（国基研企画委員兼研究員、麗澤大学客員教授）

すでに本書については多くの論者が書評を書いている。また、私も『歴史認識問題研究』第六号で長い書評論文を書いた。そこでここでは、（一）日本語版と韓国語原本で副題が異なっていることと（二）「種族主義」という用語、の二つの論点について絞って本書の持つ意味について愚考を披瀝して任を果たしたい。

韓国語の原本の副題は「大韓民国危機の根源」だった。ところが日本語版では「日韓危機の根源」とそれが変えられている。本書は翻訳者を別に立てず、李栄薫先生たちが李承晩学堂の関係者による訳文に大幅に手を入れ、それを文藝春秋の編集者がまた手を入れて出版された。実は編集協力者の一人として私も日本語訳文について意見を申し上げた。副題については、文藝春秋の編集者が李栄薫先生と相談の上、日本の読者のためにつけたものだと聞いた。

日本で本書が四十万部を超すベストセラーになった大きな理由は、韓国の学者が韓国の反日歴史観を否定したとして注目が集まったことにある。しかし、韓国語原本の副題が示すように本書は日韓関係を主題にして書かれたものではない。いま、李栄薫先生たちの祖国大韓民国が危機を迎えており、その根源に「反日種族主義」があるということを、韓国民に訴えた憂国の書なのだ。

慰安婦問題に関する記述からもそのことがよく分かる。これまで私を含む日本の専門家が繰り返し論じてきたように、慰安婦問題は日本の反日勢力が一九九〇年代初めに引

き起こしたものだが、本書では日本国内で九〇年代初め以降、慰安婦問題を巡りどのような動きがあったのかについて、ほとんど論じられていない。これも本書が日韓関係ではなく韓国の危機を主題にしているからこそ、なのだ。

日本の大部分の読者は、李栄薫先生が「プロローグ、嘘の国」で自国のことを「嘘の国」と書いていることから、短絡的に、韓国による積み重なった嘘が現在の日韓関係の危機の原因だという、自分の実感を確認し、それ以上、思考が進まないかのようだ。実はその冒頭部分にこそ同書の問題意識がよく現れているのだが、日本の読者の大部分は、韓国現代思想史、政治史の知識がないため、そのことを読み落としている。

プロローグで李栄薫先生は、反日種族主義をそのままにしておいては、この国の先進化は不可能で、先進化どころか後進化するとして、「嘘の文化、政治、学問、裁判はこの国を破滅に追いやる」という強い危機感を表明している。「エピローグ、反日種族主義の報い」でも「今この国は経済、政治、社会の全ての方面で危機です」、「反日種族主義は、この国を再び亡国の道に引きずり込んで行くかもしれません」とより直截的に書いている。

李栄薫先生たちが心配しているのは日韓関係ではなく、韓国の亡国だということがここを読むだけでもよく分かる。私もその主張に全く同感なのだ。私は二〇〇五年に出した拙著『韓国分裂』などで北朝鮮の工作の結果、韓国に「反韓自虐史観」が拡散しているとしてその危険性を指摘し続けてきた。私が「反韓自虐史観」と呼んだ歴史観は、本書で李栄薫先生が提唱された「反日種族主義」と重なる部分が多い。

それは、日本統治時代に日本に協力した親日派が清算されずに親米派に化けて大韓民国建国の主役となり、その後も反共派、経済開発勢力と姿を変えつつ韓国を支配し続けた。李承晩、朴正熙、全斗煥、盧泰愚、李明博、朴槿恵とつづく、韓国保守政権の主流勢力はみな親日派の後裔で汚れた者らで清算の対象だ、それに比べて北朝鮮は抗日武装闘争の英雄の金日成が建国し、親日派を徹底的に処分し、ソ連と中国からも距離を置いた主体的な国だから民族の正統性は北朝鮮にあるとされる歴史観だ。

李栄薫先生は、なぜ韓国の学者、言論人、政治家らが嘘に基づく歴史観を容易に信じてしまうのかと言う問題意識から、韓国の民族主義の未成熟さに注目して、「種族主義、トライバリズム」という概念を提唱された。

韓国の民族主義は、西洋で勃興した民族主義とは別のものです。韓国の民族主義には、自由で独立的な個人という概念がありません。韓国の民族はそれ自体で一つの集団であり、一つの権威であり、一つの身分です。そのため、むしろ種族と言ったほうが適切です。隣の日本を永遠の仇と捉える敵対感情です。ありとあらゆる嘘が作られ広がるのは、このような集団心性に因るものです。すなわち反日種族主義です。（二四頁）

私は、この歴史観がただ日本の過去を非難するのではなく、韓国の主流勢力を「親日派の後裔」という汚名を着せて追い落とすことを目的としているという意味で「反韓自虐史観」という用語を使っている。

私はこの間繰り返し書いてきたが、文在寅氏は大統領就任四ヵ月前の二〇一七年一月に出した著書『大韓民国が尋ねる完全に新しい国、文在寅が答える』の中でこの歴史観を正直に記述している。

〈親日勢力が解放後にも依然として権力を握り、独裁勢力と安保を口実にしたニセ保守勢力は民主化以後も私たちの社会を支配し続け、その時その時化粧だけを変えたのです。親日から反共に、または産業化勢力に、地域主義を利用して保守という名に、これが本当に偽善的な虚偽勢力です。（略）

経済交代、世代交代、過去の古い秩序や体制、勢力に対する歴史交代をしなければならないのです。そのためには法的、制度的に根本的なシステムを備えなければなりません〉（前掲書六八頁）

そして、日韓関係の観点からするならば、この歴史観は日本人に対する事実無根の誹謗中傷を土台とし、日本人を永遠に下に見る蔑視が含まれるので「反日差別主義、レイシズム」という呼び方をすべきではないかと考える。平成三〇年十一月の「国基研 会員の集い」で論じたが、一九九〇年代初め、ソ連と東欧圏が崩壊した第一次冷戦で共産圏が敗れたとき、中国共産党と北朝鮮労働党と日本の左翼が共謀して反日差別主義に自分たちの生き残る道を見いだした。それは事実無根で日本人の民族性への抜きがたい蔑視を含む歴史観だ。我が国の隣国と国内に日本人を理不尽に憎む勢力が多数布陣している。これは日本の危機だ。本書はそのことを教えてくれる。